

## スポーツ競技者の身体感覚とアイデンティティ

大隈節子（九州大学大学院）

### I. はじめに

私たちが一般的な日常生活を行っている際には、「からだ」に意識をむけることはあまりないのではないだろうか。つまり日常生活を送る際においては、からだに対しては意識せず、ほとんどが外界の対象に対して意識を向けながら生活していることが多いと言える。

これに対して、スポーツを行う場面には身体へ意識を向ける機会が多く与えられる。例えば、ベテランの水泳競技者は水を触れることによって得られる感覚でその時の調子が判断できるといわれ、またアメリカの大リーガー選手であるイチローは、バッティングにおけるタイミングと体の動きを感覚として掴んでおり、明確にそれらを認識することができるのだという。競技者間の差があるとはいえ、スポーツ競技者はプレーする際の身体の動きに対して、その「コツ」ともいべき身体の内側から感じ取る感覚を意識していると言えよう。

本研究は、スポーツ競技者が知覚しているこの身体感覚をスポーツ競技者のアイデンティティとして捉えることの研究可能性について検討することを目的とする。

### II. アイデンティティについて

精神分析医である E.H.エリクソンは、このアイデンティティという言葉が研究者が外側から定義づけるためのものとしてではなく、その当事者が内側から捉えている実感を何とか表現するための造語として位置づけている。そのためにこの言葉に対する解釈は多様に行われている。その中の一つに〈わたし〉という言葉を用いてアイデンティティを説明している。

〈わたし〉とは、意識的一貫性や自己斉一性（意識的連続性）を持つもので、全く意識的なものであり、これが「人が自分自身に気づくということの核心」、また「自己分析を可能にする能力」だと捉えられている。つまり、一人一人の個人が自覚しているという意味での意識的連続性をもった一つの中心であるということに言語上での保障を与える基盤である。よってこの感覚は、生きているという感覚、ひいてはいきいきと存在しているという感覚とほとんど同義だと捉えられている。

しかし、この〈わたし〉とはいつ何時にも変わらず一貫した唯一無二のものだという意味合いにおいて、また外界とは無関係な個人の内側に、外皮を剥ぎ取っていった最後の中核として存在する実体として捉えられてはいない。

このことについては、自己意識とは身体を介して行われる脳と環境の相互作用の記憶である「来歴」だとする下條<sup>1)</sup>の研究や、「私」とは自我内の「内なる他者」との関係性において捉えられるとする浜田<sup>2)</sup>の研究、日本人は人と人との関係性に意識しながら存在しているとする浜口<sup>3)</sup>の研究と同様の見解だと言える。

つまり、〈わたし〉とは、なんら独立した自己完結的な存在ではなく、徹頭徹尾「何かとの関係」のなかに存在しながら、その中で自覚しているという意味での一つの中心性の感覚を与える機能だと言える。

これらに鑑みるならば、アイデンティティとは、意識的連続性をもつ「一貫した〈わたし〉」によって捉えられた記憶であると同時に、〈意味ある他者〉の拡大と相即し、他者との関係性において「より新しい〈わたし〉へと変わっていく」といった〈プロセス〉の中で捉えられるものだと言えよう。そして、アイデンティティの実感とは、〈わたし〉が〈同一の自分として一貫性を持つこと〉と他者との関係性において〈絶えず新しい自分へと変様してゆくこと〉との矛盾した感覚を親和的に引き受けながら、「より広い自分」へと向かっている際に得られる実感だと捉えられる。

### III. スポーツ競技者の身体感覚

佐々木<sup>4)</sup>は、人が地表面に立ったり、その上を歩いたり、走ったりできるのは、有機体とそれを取りまく環境との「関係」によるものだと言っている。つまり、スポーツ競技者の技術の「コツ」は、対象がボールである場合には、ボールとの関係性の習熟の結果として得られるものである。そして、重要なのはある動作を身につけることではなく、ボールの重さや形状、硬さなどに対応しつつ、ボールとのあいだに特定の関係パターンを確立するということといえよう。

また、このスポーツ競技者が体感している外部環境との関わり方については、市川<sup>5)</sup>が理論的な説明を与えてくれる。彼は、身体には、世界に関わり世界に働きかけ世界を変化させるという外部指向的・外部作用的な側面があると同時に、世界との関わりの中で自己自身を調整するという自己作用的な側面があるが、そうした世界と身体が交叉している共通の根に関わる根源的な感覚こそが身体感覚であると述べている。

つまり、バスケット競技者は、ゴールまでの距離、方向、ボールの重さなどの外界状況を身体感覚である「ボールとのタッチの感覚」によって知覚しているため、シュートを上達させるためにはこの感覚を固定することが重要と言える。

すなわち、タッチ感覚は内部知覚であると同時に外界知覚でもあり、それによって内と外との関係性の適切な感覚が把握され、シュートの技術は上達すると考えられよう。

スポーツ競技者は身体の内側から外界の「もの」と身体との適切な関係性を「コツ」として把握していると言えるだろう。また、身体の構造化の進展は自分と「もの」とのある一定の固定された外部環境のもとでの相互作用だと捉えることはできない。ある固定化された状況において、ある程度の「もの」との相互作用が安定するようになると、スポーツの競技場において考えられるより多様な関係性（他の競技者との関係性等）にまで環境を広げ、それらの関係性の中で身体感覚を捉え直していくことで技術は向上すると考えられるからである。つまり、スポーツ技術の向上には、スポーツ競技者の身体感覚は多様な関係性を考慮することが必要であり、より拡大した外部環境をより明確に自分との関係性の中に位置づけていくことで技術の向上は達成される。スポーツ競技者は、日夜練習に励み、既に保持している身体感覚を用いながらそれを新たなより広範囲な外部環境との相互作用の感覚へと組み替えることの積み重ねの結果として高度な技術を習得している。それは身体と外部環境との関係性の広がりの中で反省的に身体感覚を捉えていることに他ならないといえるだろう。

#### IV. スポーツ競技者のアイデンティティ

スポーツ競技者の技術は身体感覚を通じた外部環境との相互作用の結果獲得され、関係性の空間的な広がりの中でより高度なものへ発達していくと捉えられた。また、スポーツ競技者は、身体感覚を媒介とした「もの」との関係性を中核として、それぞれの味方プレーヤーとの関係性から相手チームプレーヤーとの関係性へとといったように、自らの技術を関係性の広がりの中で捉え直す過程を繰り返している。つまり高レベルのスポーツ競技者の技術は、より広い関係性を考慮して成り立っていると考えられ、またそれらの身体感覚は向上する程より明確になり、融通の利くものになると考えられるのではないだろうか。このことを考慮するならば、まさにこのスポーツ競技者におけるこうした技術習得・向上過程の一連の身体感覚の記憶であって、また外部環境との相互作用によって身体感覚が変化していく際に得られる実感こそが、アイデンティティの実感と捉えられよう。

#### V. さいごに

東方<sup>6)</sup>によれば近年の社会現象とまでいわれたランニングブームの要因は、現在社会における自己がさまざまな社会的役割を多様に担いながら、他者たちとの差異にその根拠を求めねばならないのに対し、ランニングの経験は、身体にまわりついた社会的なものをはぎとり、「実存的レベルの身体」によって得られるアイデンティティの再構成を可能にするためであり、ランニングを行なうことがより確かな自己を把握することにつながることを示唆している。

つまり、このスポーツ競技者が実感しているアイデンティティの感覚は、自己のより深い部分に関わってくるものと言えるだろう。しかし、厳密に言えば、社会において社会的役割が付与されるのと同様に、スポーツを行なう際においてもその周囲にはチームという社会的集団の存在があり、またそれを取り巻く競技団体などといった社会的な組織といった関係の層に囲まれている。そしてこれらの関係性はスポーツ競技者が自己の技術をどう捉えるかといった評価の基準に影響を及ぼすと考えられる。

しかし、これらの社会的関係性からの評価と競技者の技術の自己把握的側面との関連の仕方は複雑であり、他者評価が技術的自己把握に方向性を与えるだけでなく、逆に技術的自己把握が他者からの新たな評価を引き出していくといったことも起こるのであり、これらのスポーツ競技者のアイデンティティと社会的関係性に着目した詳細な研究が必要と思われる。

#### 引用・参考文献

- 1) 下条信輔：〈意識〉とは何だろうか，講談社現代新書，1999，pp.128-132.
- 2) 浜田寿美男：「私」とは何か，講談社選書メチエ，1999，pp.263-265.
- 3) 浜口恵俊：日本研究原論，有斐閣，1998，pp.77-80.
- 4) 佐々木正人：知覚はおわらない，青土社，2000，pp.37-64.
- 5) 市川 浩：（身）の構造，講談社学術文庫，1999，pp.188-191.
- 6) 東方美奈子：「体験としてのスポーツ」における「身体」，スポーツ社会学研究第6巻，1998，pp.45-57.